

初年次学生の意見文に見られるパラグラフがまとまらない問題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2024-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西谷,尚徳 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/0002000794

初年次学生の意見文に見られる パラグラフがまとまらない問題

The problem of uncoordinated paragraphs in first-year students' opinion pieces

博士後期課程 国際日本学専攻 2019 年度入学

西 谷 尚 徳

NISHITANI Hisanori

【論文要旨】

学生に意見文を書かせてみると、その内容がまとまっておらず、表現・内容にずれが生じてしまっている問題が現れる。本稿では、学生の意見文に見られるパラグラフがまとまらない問題を探ることを目的に、「中心文」「支持文」「結論文」にどういった問題が生じているのか検討を行った。その結果、「中心文の主張が不明確なもの」「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」「支持文の順番が整理されていないもの」「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」の四つの問題があることを実証的に示した。「中心文の主張が不明確なもの」は、「中心文」で主張する内容を明確に示すことができず、その内容が読み取れないものである。「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」は、「支持文」の中に「中心文」と関連していないように読み取れるものである。「支持文の順番が整理されていないもの」は、「支持文」が整理されていないために、並べ替える必要があるものである。「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」は、「結論文」で「中心文」の内容が再提示されない、あるいはパラグラフの内容をまとめるような一文になっていないものである。

【キーワード】 パラグラフ・ライティング, 意見文, パラグラフ, 初年次教育, アカデミック・ライティング教育

1. はじめに

大学のアカデミック・ライティング教育（以下、AW教育）で初年次教育段階の学生（以下、学生）に論文やレポートなどの文章力養成を目的として、その導入段階で意見文を書かせる指導が扱われているようである（銅直・坂東：2013，井下：2019，伊集院・高野：2020）。学生に意見文を書かせてみると、そのパラグラフの内容がまとまっておらず、表現・内容にずれが生じてしまっている問題が現れる。その問題は、次の文例のようなものである。

- ①晩婚化の原因に、若者の貧困が挙げられる。【中心文：若者の貧困】
- ②結婚して二人で働いて生活できたとしても、もし子供が生まれることになれば、妻は少なくとも出産前後は働けず、もし保育園に入れなければその間も妻の収入なしで生活せざるを得ない。【支持文：出産後の収入がない生活】
- ③非正規雇用の若者の増加は、将来を描けないことと無関係とは言えない。【支持文：非正規雇用の若者の増加】
- ④実際自分の周りでも、非正規雇用が問題で離婚している家庭は多いと感じる。【支持文：書き手が知る離婚した家庭】
- ⑤女性も男性も希望する期間の育児休業を取りづらさというのは、少子高齢化の抑止の観点からも改善すべきである。【支持文：育児休業の取りづらさ】
- ⑥長い時間かけて選んだ相手と結婚したいと思っても、貧困の理由によって晩婚化を促進させているのではないかと考える。【結論文：晩婚化の原因】

上例は、筆者が担当するAW教育の授業で書かれた意見文の初稿の一段落を抜粋したものである。執筆要領については3節で、各文の分析方法については4節で詳述する。このパラグラフは、支持文を整理できていない問題を抱えていると考えられる。「支持文」は、「原則としてパラグラフのトピック・センテンス（中心文）と明確な関連を持たなければならない」（永井，2023:括弧内筆者）というルールがある。この「明確な関連」は、二つの意味を持つと筆者は考える。一つ目は、一文ごとの支持文が中心文と「明確な関連」を持っているということである。この場合、一文ごとの支持文が中心文を直接支持していると読み取れるものでなくてはならない。上例で言えば、支持文②「出産後の収入がない生活」と支持文③「非正規雇用の若者の増加」は、それぞれが結婚生活において働かざるを得ない状況を説明する内容として、中心文①「若者の貧困」という主張を支持する文であることがわかる。二つ目は、二文以上の連続する支持文が中心文と「明確な関連」を持っているということである。関連し合う支持文がパラグラフ内で離れて記述されていると、読み手はどの支持文と組み合わせさせて中心文を支持しているのか、読み取ることが難しくなる。複数の支持文で中心文を支持する場合、それらの支持文を続けて述べることで組み合わせさせて支持していると読

み取りやすくなる。上例で言えば、支持文④「書き手が知る離婚した家庭」は書き手の感想を述べた一文であるが、直前の支持文③と組み合わせれば中心文①を支持していると読み取ることができる。このように、二文以上の支持文で中心文①と「明確な関連」を持たせる場合もある。しかし、これらのように中心文との「明確な関連」が支持文に見られないと、読み手の理解を困難にさせるため大きな問題となる。その問題は、上例の支持文⑤である。支持文⑤「育児休業の取りづらさ」は、その後半で述べられる内容「少子高齢化の抑止の観点からも改善すべき」があることで、「育児休業の取りづらさ」を「改善すべき」と提案する一文と読み取れる。つまり、支持文⑤の一文で中心文を支持するものと想定して読むことができない。文の前半は支持文②に関連していて、これと併せれば中心文①「若者の貧困」を支持していると言えそうである。しかし、その場合は支持文⑤を②の後に並び替えて、支持文②と⑤を連続させることで、読み手に「明確な関連」が伝わるように整理しなければならない。

このような筆者の評価は、パラグラフ・ライティング（以下、PW）における書き方に基づいている。すなわち、段落の開始部に中心文を置き、これを支える支持文に続いて段落の終了部に結論文を置く三部構造である（石黒，2020）。日本語の場合、段落の開始部に中心文を置き、これを支える支持文によって二部構造を持つこともある（石黒，2020）。このPWにおける「パラグラフ」は、「すべてのセンテンスが明確に一つの話題について述べていて、全体として一つのメッセージを成している」とされる（石井，2015）。これらのことを勘案すると、上例のように、支持文が整理されていないことで別の話題を述べているようにも読み取れるのであれば、明確に一つの話題を述べているとは言えない。全体として一つのメッセージを成していない、まとまりがないパラグラフと言うことができる。

学生がまとまりのあるパラグラフを書くよう指導するため、AW教育においては、PWが指導法の一つとして扱われる。学生のパラグラフに問題が現れるのであれば、教師によってパラグラフがまとまるように書かせるための何らかの指導や対処が必要であろう。このような課題を解決するには、まずパラグラフに現れる問題にどのようなものがあるのかを探り、その問題を分析して明らかにする必要がある。

こうした問題意識から、本稿では、上例のような学生の文章に現れるパラグラフがまとまらない問題について、それがどのようなものかを探り、パラグラフ内の中心文・支持文・結論文の関係に焦点を当て、なぜパラグラフがまとまらない問題が現れてしまうのかを考察することとした。

2. 先行研究

2.1. パラグラフ・ライティング（PW）とは

「PW」とは、アメリカをはじめとする欧米諸国では当たり前のように指導されている、「一つのパラグラフで一つの話題だけを扱う」文章の書き方のことである（石井，2015；山根，2018）。「一つの話題」とは、すなわち主張する内容を示す「中心文」、複数の理由や根拠を述べる「支持文」、

場合によっては主張を再提示する、またはパラグラフをまとめる「結論文」を含めることによって、説明されるパラグラフのことである。書き手には、それぞれの文の機能に応じた作文が求められる。

「中心文」は、読み手に内容の見通しを与えるために、そのパラグラフで何を述べるかを一文で述べた文であり、原則としてパラグラフの冒頭に置かれる（永井，2023）。中心文は段落や文章全体の理解に関わる重要な文である。読み手は、中心文からパラグラフの内容を効率よく読み取ることができるだけでなく、以降のパラグラフで書かれる内容を予測して読むことが可能になる。

「支持文」は、中心文で提示された内容を展開する文であり、中心文と明確な関連を持たなければならない（永井，2023）。この「明確な関連」については先述の通り、「一文ごとの支持文が中心文と明確な関連を持っていること」と「二文以上の連続する支持文が中心文と明確な関連を持っていること」という二つの意味を持つ。支持文で関連させて述べられる内容は、具体的な例、詳しい説明、理由などを書く（伊集院・高野，2020）。それらの内容が中心文と「明確な関連」を持っていないと、読み手は支持文から得られる展開の予測を裏切られることになり混乱してしまう。そのため、支持文の一文が直接中心文に関係して支持する内容になっているか、あるいは他の連続する支持文と組み合わせることで中心文を支持しているか、ということが読み手に伝わるように書くことが求められる。

「結論文」は、パラグラフの終わりを示すと同時に、中心文で述べられた話題を再提示する、またはパラグラフの内容をまとめる文であり、原則としてパラグラフの最後に置かれる（永井，2023）。中心文と支持文を含めたパラグラフ全体の内容をより深く踏まえ、まとめることもできる（石黒，2020）。この結論文に書く内容は、「（中心文を）再提示する」か「（全体を）まとめる」かを書き手が選択することになる。いずれにおいても「中心文」と「支持文」の内容と関連していて、それらが「結論文」によってパラグラフがまとめられるように書くことが求められる。

2.2. パラグラフ・ライティングの教育実践の現状と課題

学生にPWの書き方を学ばせることは、一つのパラグラフを「中心文」「支持文」「結論文」といったそれぞれの文の機能を意識させて、一文ごとに明確な文を書かせるために役立てることができる。これは、いわばパラグラフを書くための一つの型を学ばせることである。PWの技能を習得することは、各文の機能に見合った作文ができるようになるだけでなく、パラグラフ内の文と文のつながりやその文脈に意味的なまとまりをもたせることにつながると考えられる。

「意見文」は、書き手の頭の中の知識や一般知識で書いてよいものとされ、資料やデータに基づく客観的証拠の提示や文献の引用がなくても問題ない（伊集院・高野，2020）。これは、学生にとって執筆しやすく、意見文を書くことでPWの技能を習得できる利点がある（大島，2011）。

大島（2011）は、大学学部1年生の必修科目「日本語表現法」（前期13週の授業）の中で、30～50名を対象に「ある事柄について情報を収集したのち書き手の立場や意見を論理的に展開することを要求した課題」について書かせて、ライティングのプロセスを学ばせる実践を行った。履修

者への終了後のアンケート調査の結果からは、PWの指導を受けてからの執筆段階で、多くの回答者が「型によって主張が明瞭に見えてきた」「アウトラインからパラグラフへの移行に成功した」「書いていくうちにやりたいテーマが見つかった」などの肯定的な回答をしたことが確認されている。一方で、「何を伝えたいかが決まらない」「情報収集をやり直した」「実際に書き進めるとなかなか進まなかった」等の否定的意見からは、PWの課題を残したと言える。

薄井（2015）の実践では、大学の学びに必要な「書く力」を育てるための初年次教育科目「日本語の技法」で、PWの技法を受講生に習得させることを目的に、その指導効果を明らかにしている。この効果は、指導後に提出されたレポートをルーブリック評価で検証するものである。その結果、表記の形式的ルール、文体の統一、文相互の論理関係、序論・本論・結論の構成などでは一定の効果があったものの、中心文（主張）が明確であるかどうか、その中心文を支持文（根拠）によって指示しているか、といったパラグラフがまとめられていることについては効果が得られなかった。

先行研究に共通することは、学生がPWによって一つのパラグラフがまとまるように書けなかった課題である。学生がPWによってまとまったパラグラフが書けないのであれば、それを書けるように導くためにどうすればよいか、という指導が求められる。このような課題に対して、筆者はPWの技法によって意見文を書かせることが有効であると考え。その理由は、意見文は一つのパラグラフを「中心文」「支持文」「結論文」で構成するため、PWを用いた型による書き方やそのルールを示して書かせることができるからである。PWの型やルールがあることで、学生に「中心文」で自身が主張したいことを書き、その理由と根拠を「支持文」で説明し、最後の「結論文」でパラグラフを総括する、といった各文の機能を意識して、一つのパラグラフを書くことに集中させられると考える。PWを学習した学生が書く意見文に、1節で挙げたようなパラグラフがまとめられない問題があれば、その問題を明らかにすることが、問題のあるパラグラフを書き換えて、よりよい文章にするための具体的な課題を提示することにつながると筆者は考える。

そこで、本稿では、「中心文」「支持文」「結論文」のどの文にどういった問題が生じているのかということの研究設問として立て論じることとする。

3. 調査概要

3.1. 授業の概要

本稿で実施した授業は、筆者が担当するAW教育の授業「アカデミック・ライティング」である。この授業内で書かれた意見文をデータとする。学生に意見文を書かせる際、次のような全2回の授業（90分を2回）を経た。

授業の概要は、主張（中心文）とそれを支える根拠（支持文）による意見文の書き方（伊集院・高橋，2020）、意見文の構成（銅直・坂東，2013）を参考に、意見文を執筆する際の注意点や執筆要領を補足したスライドを用いて、それぞれの授業で該当する講義内容を説明した（図1）。図1のスライドは、配布資料として授業開始時に配布し、聴講および執筆時に映写しながら適宜参考に

するよう指示した。

1 回目の授業は、意見文の書き方を理解するための講義である。伊集院・高橋（2020）や銅直・坂東（2013）の教科書を参考に、意見文の書き方として PW の技法を紹介した上で、中心文と支持文によって一つの段落を形成することを教示し、場合によっては結論文でまとめてもよいことを説明した。教科書で説明される意見文の書き方を用いたのは、そこで解説される PW の技法を忠実に指導することで、パラグラフの書き方の指導内容を統一して指示するためである。中心文は、原則としてパラグラフの冒頭に置くよう指示した。支持文は理由や根拠を述べることで中心文を支えるよう論述することを伝えた。結論文を書く場合は、中心文で述べた内容を再提示するか、パラグラフの内容をまとめるかの一文を段落の最後部に置くよう指示した。

2 回目の授業は、意見文を執筆するための演習である。授業内で学生に課題を提示して、実際に意見文を書かせる。意見文の課題は「晩婚化の原因とその展望について」とし、1800 字程度の文字数にするように指示した。この課題は「JCK 作文コーパス」という、日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者による日本語作文を収録しているコーパスをもとに設定したものである。JCK 作文コーパスには、日本語母語話者が書いた同課題の意見文が収録されている。コーパスに収録される意見文と同じ課題で書かせることで、学生はコーパスを参考にして執筆できると考えた。学生には、JCK 作文コーパスを紹介し、執筆時に参考にしてよいこととした。

<p>A 意見文とは</p> <p>与えられた課題に関し、意見・立場・提案などの主張を根拠を挙げて論理的に伝えることを目的とする文章</p> <p>根拠は、書き手の頭の中の知識や一般的知識、社会的常識でよい。資料やデータに基づく客観的証拠の提示や文献の引用はなくても問題ない。</p> <p><small>出典：伊集院朝子・高野愛子（2020）『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』アスク出版</small></p>	<p>B 意見文の書き方</p> <p>構成は①段落の構成と、②（後述する）文章全体の構成を組む。</p> <p>①段落の構成は、主張したい「中心文」と、複数の理由や根拠を述べる「支持文」によって一つの段落を形成するように書く。 場合によっては、結論文で段落を締結させることもある。</p> <p>支持文とは、書き手である学生の主張（中心文）を支えるために連ねられる文のこと。中心文と結びつきが強く意味的につながる理由や根拠を挙げて述べなければならない。</p>
<p>C 意見文のルール① 主張となる中心文を書く</p> <ul style="list-style-type: none">自分が主張したいことを中心文として書く。独断で一方的な意見ではなく、明確な主張を述べる。主張を述べるために、様々な意見や多様な背景を考慮すること。 <p><small>参考：井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法 第2版』慶應義塾大学出版会。</small></p>	<p>D 意見文のルール② 中心文を支える支持文を書く</p> <ul style="list-style-type: none">主張（中心文）の内容を支える文を支持文という。支持文は、段落の具体的な内容を詳しく語る部分である。支持文は、信頼性のある根拠や理由を裏付けとして、論証するために書く。段落の最後に、小結論文といって段落全体の内容をまとめる文がはいることもある。 <p><small>参考：井下千以子（2014）『思考を鍛えるレポート・論文作成法 第2版』慶應義塾大学出版会。</small></p>

図1 授業内で示したスライド（抜粋）

3.2. 調査対象

調査に利用したデータは、2022年10月から2023年1月の間で実施された「アカデミック・ライティング」という文章表現教育の授業を履修する25名の意見文である。これらの25名は、日

本語を母語とする，法学部法学科に在籍する大学1年生である。前述した通り，意見文の書き方とPWの技法について受講している学生である。

3.3. データの収集方法

データの収集方法は，3節1項の通り，授業内でMicrosoft Wordにより作成させて，Microsoft Formsで学生1名1編ずつデータで提出させた。なお，学生から提出された意見文の平均文字数は1904字であった。

4. 方法

4.1. 分析方法

本稿では，まず筆者が25編の意見文を一つ一つ見て，「パラグラフ」を抽出した。この作業では，3節1項の通り，PWの書き方が学習されていることを前提にしているため，中心文・支持文・結論文による三部構造，および中心文・支持文による二部構造で書かれるパラグラフに限定することとした。抽出したパラグラフは，主に本論部分で書かれるものである。集計の結果，25編中87のパラグラフを確認した。

次に，パラグラフの各文に対して，中心文・支持文・結論文のいずれかを指定する作業を行った。「中心文」については，3節1項で述べた通り，学生には事前にPWを学習する中で，「主張となる中心文を書く」ように指導している。したがって，今回のパラグラフの中には，主張が示される「中心文」が冒頭にあることが条件となる。この「中心文」は，そのパラグラフで何を主張しているかを述べた一文である。本稿では，「中心文」は「原則としてパラグラフの冒頭に置く」よう指示していることから，パラグラフの冒頭に限定して，ここに「中心文」が置かれているか否かで判断した。このような基準とした理由は，筆者が「中心文」による書き手の主張を特定しやすいようにするためである。

「結論文」については，2節1項で述べた通り，「結論文」が段落の最後部に置かれることが原則とされるため，最後部に置かれる一文が「中心文」で述べられた内容を再提示する文，またはパラグラフの内容をまとめる文であることを条件として特定する。

「支持文」については，本稿では「中心文」「結論文」以外のものとして特定する。本来，「支持文」は，「中心文」で述べる主張に関して，何らかに関連させて説明しているものである。しかし，学生のパラグラフには，「支持文」と認められない文が現れることがある。本稿は「中心文」との関係やほかの支持文との関連を問題視するものであるため，「支持文」の内容を問わない。したがって，「中心文」でも「結論文」でもない一文を，一旦「支持文」と認めた上で分析することとする。このような作業によって指定した各文は，中心文は「【中心文】」，結論文は「【結論文】」，支持文は「【支持文】」，と明記した。

そして，指定した各文の命題（話題）を認定する作業を行った。この「命題」は，筆者が判断し

て各文の内容を端的な言葉で表す。例えば、「一つ目の理由は、昔に比べ男女平等になったからだと思う。」という「中心文」には、「男女平等」という命題をつける。また、「結婚しなくても女性1人で生活できるような収益、経済力があるので長く働いて、貯金をしてから結婚を考える人も多いと思う。」という「支持文」には、「貯金して結婚」という命題をつける。このように、命題をつけることで、パラグラフ内の文どうしの意味的なつながりを見やすくする。分析者（筆者）がパラグラフ内の問題を判定するため、文の内容に沿った命題が挙げられていればよい。判定の便宜を図る目的であり、命題のつけ方の厳格性や本文と命題の正確性を問うものではない。

最後に、4節2項で詳述する評価基準をもとに、筆者がそれぞれ87のパラグラフを評価して分類した。本稿では、1例でもパラグラフの問題が見られれば、問題が現れた例の数量にかかわらず、たとえ1例であっても指導すべき重大な問題として捉え、これを一つの問題として分類することとする。

4.2. 評価基準と問題の分類

本稿で分析する範囲は、「形式段落ごとを一区分として、改行一字下げの形で（次の改行まで）表される文のまとまり」を「パラグラフ」と定義し、これに該当するものを分析の対象とする。

学生が書いた「パラグラフ」の「段落がまとまらない問題」を評価するには、「中心文」「支持文」「結論文」の各文を分析して、それらに問題があるか否かを特定する必要がある。この基準を設定するにあたり、本稿ではPW及び「中心文」「支持文」「結論文」の各文の機能について2章1節で述べた先行研究をもとにする。

- ①段落の開始部（一文目）の「中心文」による主張が明確であること
- ②「中心文」と複数の「支持文」が一つの話題を述べる内容であること
- ③「支持文」が順序立てて整理されて述べられていること
- ④「結論文」がある場合は、「中心文」と「支持文」をまとめる内容であること

評価基準①は、パラグラフの冒頭に「中心文」が置かれることを前提に、その一文が書き手の主張を明確に示している必要があるという理由から設定した。永井（2023）では、「中心文」が「何を述べるかを一文で述べた文」としているが、これを意見文のパラグラフに当てはめれば、そこで述べられる内容は書き手が伝えたいこと、すなわち「主張」であると考えられる。「中心文」は必ずしも主張が述べる一文とは限らないが、本稿が学生に課した課題「晩婚化の原因とその展望について」から考えると、PWの技法で述べられる一つのパラグラフには、書き手の「晩婚化の原因と考える主張」が述べられることが求められる。

評価基準②は、PWの定義「一つのパラグラフで一つの話題だけを扱う文章」（石井, 2015; 山根, 2018）に則り、「支持文」が中心文で提示された内容を支持するように展開されていることを理由

に設定した（永井，2023）。「支持文」には，具体的な例，詳しい説明，理由などが述べられる（伊集院・高野，2020）と想定されるが，そのような内容によって中心文を支持していないものがあると，その「支持文」が一つの話題だけを扱うものではない要因となる。一つのパラグラフは，中心文での一つの話題を複数の支持文で支持するように述べられることが求められる

評価基準③は，「支持文」が中心文と「明確な関連」を持たなければならないことから（永井，2023），「支持文」に具体的な例，詳しい説明，理由などが二文以上に渡って書かれる場合には，順序立てて述べられることを理由に設定した（伊集院・高野，2020）。具体的には，二文以上の支持文を続けて述べられていることである。支持文の一文が直接，中心文を支持していれば「明確な関連」がわかりやすいが，他の支持文と組み合わせて支持する場合，これらの支持文がパラグラフ内で別れて置かれていると中心文との「明確な関連」がわかりにくくなる。読み手が展開の予測を裏切られないよう，支持文の順序を整理して書くことが求められる。

評価基準④は，パラグラフの終わりに「結論文」が置かれることを前提に（永井，2023），中心文で述べられた話題を再提示する，またはパラグラフの内容をまとめる文であることを理由に設定した。この両者の別は問わないが，いずれにおいても「中心文」と「支持文」の内容に関連していて，パラグラフがまとめられるように書くことが求められる。

本稿では，これらの①～④のうち，いずれかでも逸脱するものを「パラグラフがまとまらない問題」として判定する。問題の分類は，①を逸脱したものは「中心文の主張が不明確なもの」として，②を逸脱したものは「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」として，③を逸脱したものは「支持文の順番が整理されていないもの」として，④を逸脱したものは「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」とする。

このような条件を用いて分類した結果，34箇所（39％）に問題があることを確認した。以降では，これらの問題の分類について論じることとする。

5. パラグラフがまとまらない問題

5.1. 中心文の主張が不明確なもの

一つ目の問題は，「中心文の主張が不明確なもの」である。「中心文」で述べられる主張が不明確で，その内容を読み取ることができない問題である。これは評価基準①を逸脱する問題であることから，「中心文の主張が不明確なもの」として分類した。

- (1) ①一つ目は，内閣府によると日本では女性の年齢別労働力率がいわゆる M 字型カーブを描くことが特徴的である。【中心文：女性の労働力率】
- ② 1960 年代から 70 年代まで，女性の平均初婚年齢は 24 歳前後で安定していた。【支持文：女性の平均初婚年齢】
- ③ 20 代前半に就業後，25 ～ 34 歳の年齢層になると，結婚や出産，子育て等のために離職し，

- 40代からまた働く人たちが増加するという行動が顕著にみられた。【支持文：離職と再就職】
- ④女性の所得水準の上昇も関係があると考え。【支持文：女性の所得水準の上昇】
 - ⑤1980年（昭和55年）の女性の平均賃金が116,900円なのに対し2019年（令和元年）には251,000円に大きく上昇している。【支持文：平均賃金の上昇】
 - ⑥女性の所得水準が上昇することにより生活に対する金銭的な不安が軽減される。【支持文：生活での金銭的な不安の軽減】

(1) は、一文目の書き出しが「一つ目は」となっていて、「一つ目の主張」を述べようとしていることが分かる。しかし、中心文①は主張ではなく、「日本の女性の年齢別労働力率」を説明する文である。(1) は、中心文で主張したい内容を明確化して論述できなかった問題である。

- (2) ①一つ目の理由に、今現在している仕事が忙しいだとか、早く功績をあげて出世したいだとか、仕事が楽しくて結婚をあえてしないといった人たちも大勢いる。【中心文：結婚を選択しない人】
- ②さらには女性の社会進出によって、女性は特に仕事をする人が増えた。【支持文：仕事をする女性の増加】
 - ③こういった人たちは結婚よりも仕事を優先し、結果結婚を後回しにしている、結婚を考え始めた時には30代目前になっているのだろう。【支持文：仕事を優先し、結婚を後回しにする人】
 - ④仕事をしていれば結婚自体に重要性や必要性を感じず、結婚という選択肢も出にくくなっているのだろうか。【支持文：結婚を選択しづらいという仮説】
 - ⑤加えて、これは結婚の先を見据えた話にはなるが子供を産んだ後、子育てをするにあたってその育児の環境があまり良くないというのもこの問題に拍車をかけているのではないか。【支持文：育児環境が良くない現状】
 - ⑥近所や勤めている会社に保育所や託児所がなく子供を預けられないが金銭面を考えると共働きせざるを得ないということになるから結婚に一步踏み出せないということもあるのだろう。【支持文：共働きをせざるを得ない状況】
 - ⑦多少は改善されたのだろうが産前産後休暇や育児休暇を取りづらいといったことが世間の話題にあがったことも記憶にある。【支持文：休暇が取りづらいという話題】
 - ⑧仕事に力を入れるのは個人の自由である以上何も言わないが、環境に関しては改善されるのを期待するしかない。【支持文：環境改善への期待】

(2) は、一文目の書き出しが「一つ目の理由に」となっていて、「一つ目の主張」を述べようとしていることが分かる。しかし、中心文①は主張ではなく、「結婚しない人」がいる現状を説明す

る文である。(2) は中心文で主張したい内容を明確化して論述できなかった問題である。

(1) と (2) の問題は、いずれも「中心文」で主張が明確に述べられていない例である。「中心文」が主張する内容を明確に示すことができなかった点で共通している。この問題は、書き手が述べようとする主張を作文できなかったこと、あるいは支持文を連ねていく中で主張したいことが明確化できなかったことが考えられる。

5.2. 中心文との関連が不明確な支持文があるもの

二つ目の問題は、「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」である。「支持文」の中に「中心文」と関連していることが読み取れないものがある問題である。中心文を支持しているか不明確な「支持文」があると、中心文とは別に支持する内容が述べられていると感じてしまう。これは評価基準②を逸脱する問題であることから、「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」として分類した。

(3) ①さらに、金銭面の問題が原因として考えることができる。【中心文：金銭面の問題】

②結婚をしてさらに出産と育児をする場合、負担となるコストは決して軽いものではないだろう。【支持文：出産と育児での負担】

③昨今、地震などの災害や未知のウイルスによって経済状況が悪化するなど、誰にも予想できないような困難に巻き込まれるなかで、結婚をして安定した暮らしを実現できる人はほんの一握りである。【支持文：経済状況の悪化による不安定な暮らし】

④誰もが将来の漠然とした不安を抱えながら生活をしている。【支持文：将来の不安を抱えた生活】

(3) は、支持文④「将来の不安を抱えた生活」が、中心文①との関連が不明確になっている問題である。支持文②「出産と育児での負担」と支持文③「経済状況の悪化による不安定な暮らし」は、中心文①「金銭面の問題」と金銭面の懸念や費用負担といったことで関連していることが明確である。しかし、支持文④は中心文①との関連が不明確なため、支持する内容として意味的につながらない。この問題は、一つの段落の中で支持文を述べる際に、主張（中心文）に関連させる支持文を述べられなかったと考えられる。

(4) ①三つ目は、独身生活に魅力が感じられる点である。【中心文：独身生活の魅力】

②昔は、お見合い結婚など結婚させる取り組みが多く行われていた。【支持文：見合い結婚の流行】

③みんなが大人になったら、結婚はするものが当たり前だと思っていた。【支持文：結婚するのが当然という書き手の思い】

- ④だが、今は結婚に対して積極的に取り組む人が減って結婚は「できない」のではなく「しない」という選択肢を選べるようになったということだ。【支持文：結婚しないという選択肢】
- ⑤特に女性は職場環境が改善され、今や男性と変わらないくらい給料をもらえるようになった。【支持文：男性と変わらない女性の給料】
- ⑥男性に経済面を任せるという意味で結婚する必要がなくなった。【支持文：経済的な協力関係が必要なくなった】

(4) は、支持文⑥「経済的な協力関係が必要なくなった」が、中心文①との関連が不明確になっている問題である。支持文②「見合い結婚の流行」、支持文③「結婚するのが当然という書き手の思い」、支持文④「結婚しないという選択肢」は、これらの三つの文が中心文①「独身生活の魅力」と結婚をしないという選択肢があるという理由で関連していることが明確である。また、支持文⑤「男性と変わらない女性の給料」は、女性が仕事や生活をしやすくなったという理由で中心文①と関連している。しかし、支持文⑥は中心文①との関連が不明確なため、支持する内容として意味的につながらない。この問題は、一つの段落の中で、支持文を述べる際に主張（中心文）に関連させられなかったと考えられる。

(3) と (4) の問題は、いずれも「中心文」と関連していることが読み取れない支持文がある問題である。「中心文」を明確に支持できていない「支持文」がある点で共通している。これは、複数の支持文を書く中で、中心文で書いた主張と明確に関連させて述べられなかったことが考えられる。

5.3. 支持文の順番が整理されていないもの

三つ目の問題は、「支持文の順番が整理されていないもの」である。「支持文」がパラグラフ内で別れて置かれているために、中心文との「明確な関連」がわかりにくくなっていることから、支持文の順序を並べ替える必要がある問題である。これは評価基準③を逸脱する問題であることから、「支持文の順番が整理されていないもの」として分類した。

- (5) ①晩婚化の原因に、若者の貧困が挙げられる。【中心文：若者の貧困】
- ②結婚して二人で働いて生活できたとしても、もし子供が生まれることになれば、妻は少なくとも出産前後は働けず、もし保育園に入れなければその間も妻の収入なしで生活せざるを得ない。【支持文：出産後の収入がない生活】
- ③非正規雇用の若者の増加は、将来を描けないことと無関係とは言えない。【支持文：非正規雇用の若者の増加】
- ④実際自分の周りでも、非正規雇用が問題で離婚している家庭は多いと感じる。【支持文：書き手が知る離婚した家庭】
- ⑤女性も男性も希望する期間の育児休業を取りづらいというのは、少子高齢化の抑止の観点か

らも改善すべきである。【支持文：育児休業の取りづらさ】

⑥長い時間かけて選んだ相手と結婚したいと思っても、貧困の理由によって晩婚化を促進させているのではないかと考える。【結論文：晩婚化の原因】

(5) は、支持文②～⑤が整理できていないことが問題である。支持文②「結婚後の生活」と支持文⑤「育児休業」は、育児に関する生活という同じ話題に関連しており、支持文③「非正規雇用」と支持文④は、非正規雇用に関する同じ話題に関連している。支持文⑤を支持文②のあとに置いて、同じ話題の組み合わせになるように、支持文②と⑤、支持文③と④という順番に並べ替えることで整理される。この問題は、同じような話題の支持文を分かれるように述べてしまっていて、それらの支持文を整理できなかったことが考えられる。

(6) ①次に、出費の増加です。【中心文：出費の増加】

②さまざまな面で発展が進んでいる現代において、さまざまな趣味趣向があります。【支持文：さまざまな趣味趣向】

③日本で物価の上昇は度々問題視されていますし、税金も上がっています。【支持文：物価の上昇と税金の負担】

④当然ながら自分の趣味などは生活していく上でとても大切な役割を果たしています。【支持文：生活する上で趣味が大切な役割】

⑤こういった生活で必須となる出費は増加しています。【支持文：生活での出費の増加】

⑥結婚して共に生活していくには多大な費用が必要ですし、子供も産むとなればそれはさらに増加します。【支持文：生活や出産での費用】

⑦さらに、税金もかかるために出費がかさむ。【支持文：税金での出費】

⑧生活に必要な不可欠な出費が増加している中で結婚に躊躇うことや、そういった出費が伴う結婚よりも一人で生活し趣味などにお金をかけたいと思う人が多くいるのです。【結論文：結婚よりも一人の生活にお金をかけたい多くの人】

(6) は、支持文②～⑦が整理できていないことが問題である。支持文②「さまざまな趣味趣向」と支持文④「生活する上で趣味が大切な役割」は、趣味に関する同じ話題に関連しており、支持文③「物価の上昇と税金の負担」と支持文⑦「税金での出費」は税金に関する同じ話題に関連している。支持文④を支持文②のあとに置いて、さらに支持文⑦を支持文③のあとに置いて、同じ話題の組み合わせになるように、支持文②と④、支持文③と⑦という順番に並べ替えることで整理される。この問題は、(5)と同様、同じような話題の支持文を分かれるように述べてしまっていて、それらの支持文を整理できなかったことが考えられる。

(5) と (6) の問題は、いずれも「支持文」の順番に問題があった例である。「支持文」が整理

されていないために、並べ替える必要がある点で共通していると考えられる。これらは、書き手が「中心文」に関連する話題で「支持文」を述べられているが、同じ話題の文が別れて置かれているため、中心文との「明確な関連」がわかりにくくなっている。同じ話題の「支持文」を連続して述べるよう整理できなかったものと考えられる。

5.4. 結論文でパラグラフをまとめられていないもの

四つ目の問題は、「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」である。「結論文」で中心文の内容が再提示されなかったり、パラグラフの内容をまとめるような一文になっていなかったりする問題である。これは評価基準④を逸脱する問題であることから、「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」として分類した。

(7) ①次に、女性の社会進出ということが挙げられる。【中心文：女性の社会進出】

②一昔前の日本では「男性が働き、女性が家事を行う」であったため、会社の中でも役職に就くことができるのはほとんど男性で「男女不平等」という言葉が多く用いられていた。【支持文：男女不平等の環境】

③しかし、「男女雇用機会均等法」が制定され、現在では女性が働きやすい環境が整えられた。【支持文：女性が働きやすい環境への改善】

④女性でも会社で役職に就いている人が多く、会社から独立して起業家として働く女性も多く存在する。【支持文：働く女性の活躍】

⑤女性は結婚して出産から育児を行うには一度仕事を辞める必要がある。【支持文：出産や育児による辞職】

⑥育児がある程度終わった後にスムーズに仕事に復帰できれば良いが、育児休暇を気軽に申請しづらい会社も多いことが現状である。【支持文：育児休暇を申請しづらい会社】

⑦「自分が築いてきたキャリアを無駄にしたくない」「結婚をして子育てをする時間よりも、自分の仕事を大切にしたい」という意識を持った女性が増えていると思う。【支持文：仕事に意欲的な女性】

⑧このようなことから、社会の発展によって人々の価値観が変化した結果であると考えられる。【結論文：人々の価値観の変化】

(7) は、結論文⑧をパラグラフを「まとめる」文として、短すぎる記述をしてしまったことが問題である。結論文⑧「人々の価値観の変化」は、「社会の発展」という部分が中心文①「女性の社会進出」と関連していると考えられるが、「人々の価値観の変化した結果」と述べられるため、中心文を再提示するものではなく、パラグラフをまとめる一文と読むことができる。結論文⑧の「社会の発展」は、中心文①「女性の社会進出」や支持文③「男女雇用機会均等法」と関連していると

読み取れる。一方で、支持文④「役職についている人」,「起業家として働く女性」, 支持文⑤「一度仕事を辞める」, 支持文⑥「育児休暇を申請しづらい労働環境」といった女性の労働環境について説明されるものがある。しかし、これらについては結論文⑧に含まれていない。このように、パラグラフ内に「女性の労働環境」への言及があるにもかかわらず、結論文でまとめる内容に含まれていないため、そのまとめ方に無理があると思われる。つまり、結論文⑧が「まとめる」文として説明不足である。「人々の価値観が変化した結果」以外に補足してまとめるように書くことができなかったものと考えられる。

- (8) ①晩婚化の最たる原因として私が考えるのは、「お金」に関する問題である。【中心文：お金の問題】
- ②現在の日本は、先進国の中でも低賃金な国と分類され、1997年以降その上昇率は0.3%と周辺国とも大きな差がついている。【支持文：日本の低賃金の状況】
- ③そんな中、結婚する時には、後の出産や出費のことを考える人がほとんどである。【支持文：結婚で出費を想定する人】
- ④これらには多くのお金が必要になってくるし、その額は多くの人がすぐに貯蓄できるものではない。【支持文：多額の費用】
- ⑤家計を支える者にとって、この「低賃金」という問題は死活問題であると思う。【支持文：低賃金の問題】
- ⑥そしてそれと同時に考えられることとして、今は「お金の使い道」の選択肢が非常に多いことが挙げられる。【支持文：出費の選択肢の多さ】
- ⑦そのような理由が交わって、「結婚」が人生の中で一番のイベントになる。【結論文：結婚が一番のイベント】

(8) は、結論文⑦を「まとめる」文として、「人生の中で一番のイベント」と短く記述してしまったことが問題である。結論文⑦「結婚が一番のイベント」は、中心文①「お金の問題」と関連していなくもないが、「お金」について述べられていないため、中心文を再提示するものではなく、パラグラフをまとめる一文と読むことができる。結論文⑦の「人生の中で一番のイベント」は、中心文①から後続する支持文の「お金の問題」が関連していると読むことができる。ただし、そう読むためには、読み手が支持文②～⑥から、「お金の問題」が結婚を決断するために重大な判断材料になるということを連想しなければならない。「イベント」には行事や催し物という意味もある。ここでの「一番のイベント」を読み解くためには、結婚することが「お金の問題」を理由に人生で重大な決断となるということを想像しなければならない。しかし、こうした連想を読み手が行わなければならない時点で、「まとめる」文として説明不足である。このようなことから、結論文⑦は、「お金の問題」が「人生の中で一番のイベント」になるという書き手の考えを補足して、まとめるよう

に書くことができなかつたものと考えられる。

(7) と (8) の問題は、いずれも「結論文」でパラグラフをまとめることができなかつた問題があつた例である。「結論文」が、その一文でパラグラフをまとめられていない点で共通している。「結論文」の役割として「再提示する」か「まとめる」か、いずれにしても「中心文」と「支持文」の内容に関連させて、パラグラフがまとめられるように書くことができなかつたものと考えられる。

5.5. 問題の4分類

5節4項までに挙例したことをもとにすると、次の四つの分類にまとめることができる。

一つ目の問題「中心文の主張が不明確なもの」は、「中心文」で主張する内容を明確に示すことができず、その内容が読み取れないものである。二つ目の問題「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」は、「支持文」の中に「中心文」と関連していないように読み取れるものである。三つ目の問題「支持文の順番が整理されていないもの」は、「支持文」が整理されていないために、並べ替える必要があるものである。四つ目の問題「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」は、「結論文」で中心文の内容が再提示されなかつたり、パラグラフの内容をまとめるような一文になっていなかったりと、パラグラフをまとめることができていないものである。

6. 考察

本項では、学生の「パラグラフがまとまらない問題」の四つの分類について、なぜそれぞれの問題が現れるのか、その事情について考察する。

一つ目の問題「中心文の主張が不明確なもの」は、中心文で示すべき主張が明確に述べられていないことが考えられる。本稿では、パラグラフの冒頭に「中心文」を置き、その文に書き手の「主張」を述べるようPWを指導した。言い換えれば、パラグラフの一文目に「伝えたいこと」を書くように条件を提示した。にもかかわらず、「中心文」で不明確な「主張」が論述される問題が散見された。本稿が挙例した(1)は、その「中心文」が内閣府からの引用を示した文になっていた。また(2)は、その「中心文」が「結婚しない人」がいる現状を説明する文になっていた。このことから筆者は、学生が主張を述べるための書き方がわからなかつた、といった課題が示されたと考えている。これらの(1)(2)の問題について、なぜ「主張」を示すことが期待される中心文で別の内容が述べられてしまうのか、その書き方がわからなかつた原因を特定したいところであるが、この特定に関しては本稿が課題を残すこととなつた。

二つ目の問題「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」は、複数の支持文の中に理由や説明が不明確な文があり、その内容が主張を十分に支持できていないことが考えられる。本稿では、PWによる書き方を指導した上で、理由や根拠を示す支持文を複数挙げて、主張を支持するように具体的に詳しく書く指示をした。筆者は、学生が複数の支持文を挙げる中、そのうち一部の支持文で主張と意味的につながるように理由や根拠が十分に書けなかつた、と考えている。本稿が挙例し

た(3)(4)は、いずれも問題の一文がほかの支持文と比較して、主張との意味的なつながりが不明確であった。これは、その一文が書き手の感想や想像を述べる文となっていたためである。

三つ目の問題「支持文の順番が整理されていないもの」は、二文以上で述べられる同じ話題の「支持文」が、別れて置かれていて整理されていないことが考えられる。本稿では、「支持文を順序立てて述べること」(伊集院・高野, 2020)を説明した。このような説明によって、筆者は「順序立てる」という意味から学生が「二文以上の同じ話題が続く場合、それらの支持文が続けて述べられる」という意味を含んで理解できると想定していた。二文以上の支持文で主張を支持する場合は、前後で続けて述べなければわかりにくくなることが考慮されるはずであろうと考えたからである。しかし、実際は挙例した(5)(6)が同じ話題を述べる支持文であっても別れて置かれていて、「支持文」の順番を整理するように書くことができていなかった。筆者の仮説の域を出ないが、学生は文を整序することや順序立てて述べることを知らないために、作文に反映できていない可能性がある。

四つ目の問題「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」は、「結論文」がパラグラフの内容をまとめるような一文になっていなかったことが考えられる。本稿では、パラグラフ内に「結論文」を置いて置かなくてもよいものと指導した上で、「結論文」を置く場合には、段落の最後部に置き、その一文が「中心文」で述べられた内容を再提示する文、またはパラグラフの内容をまとめる文であることを条件とした。しかし、実際は挙例した(7)(8)が、一部の支持文の内容を含まない結論文が書かれていた。言い換えれば、パラグラフを「まとめる」ための一文として、説明が不足していて不十分なまとめ方であった。このことから、パラグラフ全体に関して、「結論文」で再掲したり総括したりして作文することに、学生の課題があると考えられる。

7. おわりに

本稿では、学生の意見文に見られる「パラグラフがまとまらない問題」を探ることを目的に、「中心文」「支持文」「結論文」のどの文にどのような問題が生じているのかという課題を設定し、検討を行った。その結果、「中心文の主張が不明確なもの」「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」「支持文の順番が整理されていないもの」「結論文でパラグラフをまとめられていないもの」の四つの問題が確認された。学生の「パラグラフがまとまらない問題」に四つの問題があることを実証的に示すことができたことが、本稿の成果である。

一方、さらなる研究課題が明確になった。学生の「パラグラフがまとまらない問題」は、「中心文」「支持文」「結論文」の一部で、それぞれの文の機能に見合うような作文ができていないものと考えられる。学生のパラグラフの中では、問題があった文以外には文の機能に見合うような文が確認できている。そのため、学生が文の機能を理解していないことや、その機能に見合う作文がまったくできないといったことは考えにくい。こうしたことから、学生が作文の途中で推敲を充分に行わなかったことに課題があると考えられる。筆者は、学生が作文する過程で推敲を充分に行わなかったために、各文の機能に見合うような作文ができていないことを確認しないままに意見文を提出した

と推察する。

次に考えられる研究課題としては、学生がPWによって作文する際、「パラグラフがまとまらない問題」が現れないためにどのように推敲したらよいか、学生にパラグラフを推敲させるには教師がどのように指導したらよいかといったこと検討しなければならないと考える。教師が授業の場面で、どうすれば学生がパラグラフをまとめられるように推敲できるかといったことを検討したい。その上で、学生が自らパラグラフを推敲するための授業実践を試みて、まとまったパラグラフを書くための指導方法を提案するような論考を示したい。

参考文献

- 銅直信子・坂東実子（2013）『大学生のための文章表現&口頭発表練習長』国書刊行会。
- 伊集院郁子・高野愛子（2020）『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』アスク出版。
- 井下千以子（2019）『思考を鍛えるレポート・論文作成法 第3版』慶應義塾大学出版会。
- 石黒 圭（2020）『段落論－日本語の「わかりやすさ」の決め手』光文社。
- 石井洋佑（2015）『論理を学び表現力を養う英語スピーキングルールブック』テイエス企画。
- 永井 敦（2023）「パラグラフ・ライティングの基本ルール：日本語パラグラフ・ライティング教育の体系化に向けて」『神戸大学留学生教育研究』7, pp.1-20。
- 大島弥生（2011）「大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス」『言語文化と日本語教育』33, pp.57-64。
- 薄井道正（2015）「初年次アカデミック・ライティング科目における指導法とその効果—パラグラフ・ライティングと論証を柱に—」『京都大学高等教育研究』21, pp.15-25。
- 山根正博（2018）「パラグラフ・ライティング指導の実践」『東京学芸大学附属高等学校紀要』56, pp.7-12。

参考資料

- JCK 作文コーパス,「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」(2013年度～2015年度), 基盤研究 (C), (研究課題番号: 25370577, 研究代表者: 金井勇人) <http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>